

刊行にあたって

京都国立博物館は、明治三十年（一八九七）の開館以来、一千年の都、京都で護り伝えられてきた文化財を中心に、その収集・保管・展示および調査研究や教育普及事業などの活動を行ってまいりました。

諸活動の根幹をなす収集について、平成三十年度末の館蔵品の件数は八〇七五件、うち国宝二十九件、重要文化財一九六件と質の高い文化財を収蔵しております。中でも書跡部門は、全体の六分の一強にあたる一三七四件を占め、国宝十七件、重要文化財八十三件と、館内随一の充実ぶりであり、とりわけ、古写経を中心とした典籍類のコレクションは国内屈指の収蔵内容を誇っています。

当館では、これらの貴重な館蔵品を展示し、多くの皆様にご鑑賞いただけるように努めています。一方、今日まで大切に伝えられてきた国民的財産を損なうことのないよう、展示には照度や期間などの制限を設け、保存にも努めています。そのため、いつでも観たい時に観ることができるといえる訳にはいきません。そのような展示と保管の葛藤の中、わが国の歴史や文化を語る上で頗る重要な書跡を選び、そのすべてを影印し、原寸・原色で出版することを試み、これまで『浄名玄論』、吉田本『日本書紀』、岩崎本『日本書紀』などを公刊しました。いずれも、すぐれた書跡を間近に鑑賞できる、とご好評いただいております。

この度、上梓する『漢書楊雄伝第五十七』は、日本に現存する『漢書』のうち、唯一の唐鈔本であるとともに、読みをあらわす訓点の古さや種類においても著名な写本です。朝日新聞社社主、上野精一（一八八二〜一九七〇）の旧蔵品であり、平成二十七年に購入しました。当館は昭和三十五年二月、上野精一より、父の理一（有竹齋、一八四八〜一九一九）が収集した中国の明清時代を中心とする書跡および絵画、計一六三件の寄贈をうけ、「上野コレ

クシヨン」として収蔵しており、まことに縁の深い文化財と言えます。

『漢書』は中国の正史の一つです。読んだことがなくとも「百聞は一見にしかず」、「酒は百薬の長」といった『漢書』を出典とすることわざはご存じのことでしょう。日本でも古くから『後漢書』『史記』とともに、「三史」として重要視された書物で、『源氏物語』にも「三史五経、道々しき方を」とみえます。『源氏物語』の引用によらずとも、本書に付された詳細な朱・墨・白・黄の訓点や注記の数々が、その重要性を何より雄弁に物語っています。

まさしく「百聞は一見にしかず」。展示では詳細にご鑑賞いただくことの叶わない訓点・注記まで、原寸カラーで細大漏らさずご覧いただくことで、国語学や歴史学をはじめとした各分野の研究に大きく裨益することを念じます。

京都国立博物館長 佐々木丞平

目次

刊行にあたって……………京都国立博物館長 佐々木丞平 (3)

漢書楊雄伝 第五十七……………1

解題

書誌解題……………上杉智英 63

本文・訓点解題……………石塚晴通・小助川貞次 79

凡例

- ・ 京都国立博物館所蔵の国宝『漢書』楊雄伝第五十七を原色・原寸で影印した。
- ・ 影印の上部には行数を示した。
- ・ 解説は、上杉智英（京都国立博物館学芸部美術室研究員）・石塚晴通（北海道大学名誉教授・東洋文庫研究員）・小助川貞次（富山大学教授）が担当した。
- ・ 本書掲載のすべての画像は京都国立博物館および勉強出版の許可なく二次使用することを禁じる。